法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-28

# 〈書評と紹介〉小口雅史編著　デジタル古文書集　『日本古代土地経営関係史料集成 : 東大寺領・北陸編』

NAKANO, Hideo / 中野, 栄夫

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
54
(開始ページ / Start Page)
84
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)
2000-09-30

Hosei University Repository



〈書評と紹介〉

# 小口雅史編著
## デジタル古文書集
# 『日本古代土地経営関係史料集成
## ―東大寺領・北陸編―』

中野　榮夫

最近、日本史関係の書物にCD-ROMが添付されるというのも、そう珍しくはなくなった。あるいは、書物というよりCD-ROMに史料を焼き込んであることを売りにしている出版物もある。その例を手近にあるもので挙げてみるならば、西沢淳男著『幕領陣屋と代官支配』（一九九八年、岩田書院）は前者であり、福田豊彦監修『吾妻鏡・玉葉』（一九九九年、吉川弘文館）などは後者といえよう。

『デジタル古文書集　日本古代土地経営関係史料集成―東大寺領・北陸編―』と題する本書は、史料を活字化し、さらに史料をCD-ROMにも焼き込んであるので、明らかに、活字化した史料のない後者とは異なり、前者に分類されるともいえるが、前者ともいえない面がある。前者でもあり後者でもあり、また前者でもなく後者でもないのである。さらにいえば、本書は史料の写真もCDで閲覧できるので、その点では、デジタル（ビジュアル）を売りものにしている小山靖憲編『中世荘園絵図大成』（一九九七年、河出書房新社）的な要素も持ち合わせてもいるといえよう。

さて、紹介に先立ち、例によって本書の内容を示しておこう。

文書編
解説編
　文書解題
　書院正倉院文書紙背関係史料便覧
　初期荘園関係文献目録稿
論考編
　第一章　「初期荘園」研究史概要
　第二章　律令制下寺院経済の管理統制機能
　　―東大寺領北陸初期庄園分析の一視覚として―
　第三章　初期庄園の展開
　第四章　初期庄園の時代と人物

本書の内容について若干のコメントを加えておこう。「文書編」はいうまでもなく本書の表題にかかわる史料集である。もちろん県史・自治体史レベルの翻刻の仕方とは異なり、原文書の様式を踏まえつつ写真版等で校正して、原形に近い形で翻刻している。すでに活字化されている史料ばかりであるが、校訂が厳密であるので、ぜひとも参照するべきであろう。なお、本書の版下はすべて筆者が出力したもので、この点に本書の独自性の一端が見られる。その版下もCDのなかに入っており、読者が自分の仕事に自由に再利用できるよう配慮されているので、ぜひともそれを活用されることをおすすめしたい。

なお「文書編」の部分には前史があり、それは本書「はしが

Hosei University Repository

き」にも示されている。今、評者の手許に小口雅史・北啓太・佐藤信・中村順昭編『初期庄園史料集成―越前編―』（一九七九年初版）なる私家製の書物がある。手書きのものをゼロックスコピーしたもので、扉には本書の筆者小口氏の達筆とはいえない手書きの謹呈文があるが、それが「文書編」のもととなっているのである。手書きであるゆえ、料紙の破損状態など詳細に記されているが、本書ではそこまでは再現できなかったようである。ただ、のちにも紹介するが異体字などは、ここまで必要かと思われるほど、原文書の書体を再現している。

「解説編」については、とくにコメントは必要ないであろう。ここでは「個々の文書の解題と、利用した正倉院文書の表裏関係を示した表、初期荘園関係文献目録稿を収める」（「はじめに」）。「文書編」を利用するばかりでなく、ぜひともこの「解説編」も参照すべきであろう。ただ欲をいえば「表裏関係」については若干の説明があればと感じた。もう少しの工夫が必要であったように思われる。

「論考編」は筆者がいままでほぼ同名のタイトルで発表してきた論考の再収録である。ちなみに第一章・第二章は筆者の卒業論文の第一章・第二章であるという。筆者の若いころの意欲ある論考であり、初期荘園研究にとって看過することのできないものである。

さて、本書の最大の特徴は、添付のCD-ROMといってよかろう。「はじめに」にも記されているように「外見的には「添付」というものの、実際には本書の主体はそのCDにある」。文章での説明では分かりにくいので実際にご覧になっていただくほかないが、独自の検索機能を備え、白文表示・写真表示・訓点付き漢文表示などが自由に行き来できるのである。これも今までのCD出版物にない特徴といえよう。

ところで本書の「文書編」ないしCDの白文などで凝っているのは、先にも指摘した異体字処理である。日本史をデータベース化する場合、誰でも真っ先にぶつかるのが、ワープロ（パソコン）にない字体の処理である。どのワープロなどでもJIS第一水準・第二水準の字は使えるが、それにない字はたと困ってしまう。たとえば、院政期の研究などでは必須といってよい八条院瞳子の「瞳」の字は第二水準にもないのである。そういったことから、最近のCD史料集などでは、独自のフォントを添付し、それをインストールして使用してもらうといった方策がなされている。しかしその方式は、ユーザーがすでに持っている外字ファイルをそれと置き換えることになり、初心者にとってはかなり面倒で、弊害というべきもののように思われる。この点、今後このような出版物を意図している著者・出版社には、ぜひともお考えいただきたい点である。ちなみに評者はなるべく通用字で済ますようにしているが、固有名詞はやむを得ないので、アルファベットや漢字のみならず世界の文字を共通のコードに収めた文字コード規格である「Unicode」を利用している。これならば正字であればほとんど不便はない。しかし異体字となるとお手上げである。

その点を解決できるのがエーアイ・ネットの古家時雄氏（法政大学経営学部卒業生）の創案になる「今昔文字鏡」の使用であ

Hosei University Repository



る。一般に文字は異なったコードを持つが、使えるコードには限りがあるので、それではすべての文字を表すことはできない（中野榮夫『コンピュータ歴史学のすすめ』補講参照）。ところが、たとえば「雅」（ＪＩＳコード 326D、シフトＪＩＳコード 89EB、Unicode 96C5）という字にしても、コードは同じでもフォントをかえることによって明朝体やゴシック体や、行書体といったように幾つもの別の書体で表すことができる。その原理を応用して、一つのコードでも異なった文字（漢字）を表現することにより、約九万字もの漢字を利用できるようにしたのが「今昔文字鏡」である。筆者はそれを利用して、古代史料の異体字を変形することなく本書に掲載し、かつ本書ＣＤでは、異体字を区別せずして検索することも、区別して検索することもできるように工夫したのである。その検索方法も本書の特徴といえよう（その仕組みはＣＤの中身を詳細に見ることによって分かる）。先に独自のフォントを添付し、それをインストールして使用してもらうといった方策の弊害を指摘したが、本書で採用されている「今昔文字鏡」の使用は、そういった弊害を引き起こさない、一つの有効な試みとして高く評価されよう。

以上で、お分かりいただけたと思うが、本書は単なる史料集ではなく、史料翻刻（活字化のみならずＣＤ化も含めて）のあり方についての、問題提起書でもある。古代史なかんずく初期荘園に関心のない方にも、ぜひとも一度は接して欲しいものである。

ただ、ひとつ感じたのは、活字化のみの史料集であれば翻刻文字にこだわる必要があるが、本書では写真を同時に参照することもできるわけなので、活字化ないし検索の際に、異体字にここまでこだわる必要があるか、ということである。この点は、個人の好みによるものなのであろうか。

最後に、本書は初期荘園研究にとって必読の書であるにとどまらず、今後の史料翻刻に重大な影響を及ぼす問題提起書であることを確認し、筆者および割に合わない出費を強いられたと思われる出版社のご苦労をたたえたいと思う。

（Ｂ５判　三〇二頁＋ＣＤ-ＲＯＭ　本体八〇〇〇円　同成社）